

東日本大震災における被災自治体との連携による防災教育・復興後援の可能性

（震災から5年 駒澤大学高等学校被災地応援活動の記録）

駒澤大学高等学校専任教諭 理科 長谷川 宏一

1. はじめに

2011年3月11日、日本は未曾有の地震災害に見舞われた。宮城県沖を震源とした大地震の発生とそれに伴う大津波は、多くの人を巻き込み、死者15,785人、行方不明者4,467人（2015年8月現在）という、戦後最悪の自然災害になった事は記憶に新しい。この災害では東北地方の沿岸部の多くの地域が浸水したため、住民はより高台への集団移転を余儀なくされた。しかし、移転候補地の選定、また各家庭で経済状態の異なる中、コミュニティ全体での集団移転には課題が多く、未だ多くの地域で集団移転は進んでいない。仮設住宅等に避難する住人は、2016年1月14日現在で178,000人である。^{*1}本稿では、この未曾有の災害に対し、東京の私立高校である駒澤大学高等学校が取り組んできた被災地応援活動の、経緯と内容を記載する。

駒澤大学高等学校は、近年主に宮城県岩沼市と連携して、被災地応援活動に取り組んできた。そして、2012年より続けたこの活動に対し、2014年に岩沼市より功労者として感謝状を頂いている。また、2016年1月現在、「千年希望の丘」という岩沼市が行う社会

事業への協力をはじめ、今後多くの活動を継続していく基盤と信頼関係が構築されている。これらは、被災地と首都圏の高校が関わる一つのモデルケースになる可能性がある。そう考え、本稿の執筆に至った。本文は、現在までの流れを把握しやすいように、震災当時を起点として、時間順に記載している。なお、関わってくださった方々の人名に関しては、個人情報に当たするため、主だった方を除いてはなるべく文中での具体名の記載は避け、謝辞でまとめて記載している。

2. 震災当時

2011年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖地震が起きた。この時、駒澤大学高等学校では修学旅行の荷物搬送のための積み込みが行われた直後であった。3月8日に卒業式を終え、1・2年生も全員の登校日ではなかったため、校舎内には部活動で残っていた約二百数十名の生徒がいたのみだった。そのほとんどが地震のゆれでテニスコートや人工芝グラウンドに避難した。駒大高校の校舎に目立つた損傷はなかったが、校長室と応接室を隔てる部分が、1階・4階まで一部損傷した。これはこの部分を境に、校舎は増築された部分と以前より存在した部分に分かれるためである。この箇所では建物同士の干渉が起こり、壁や天井のコンクリートが一部崩れた。その他、職員室をはじめ校舎内で多くのものが倒れた。筆者はすぐに理科の実験室に行ったが、4階の化学準備室はその天井のほとんどが落下していた。

校舎内に残った生徒に対し、学校は安全を確認した後、帰宅させる可能性を探った。鉄道の運休はすぐに報道されたため、サッカー部所

有のマイクロバスで複数名の生徒を横浜方面へ送っていく計画が立てられた。しかし、当時国道246号線は大渋滞となり、マイクロバスはすぐに引き返してくることとなる。自転車や徒歩で帰ることができない生徒を除き、学校は校内で生徒たちを一泊させる準備へと入った。

新体育館に生徒を集合させ、家庭科室に備蓄されていた米を炊いて、おにぎりを作った。また、防災用毛布を出して暖をとるよう準備した。教員はシフトを組み、見回りながら夜を過ごし、ホームページのトップページを使って保護者へ学校内の状況を伝達した。当時多くの携帯端末が使用不可能になった中、インターネットの重要性を再認識させられた。また、近隣の国立医薬品衛生研究所の住宅からも30名ほどの避難者を受け入れ、病人は新体育館の貴賓室に隔離するなどの処置を取り、一晚を過ごした。近隣から避難した住民の中には、生後一週間の赤ちゃんも含まれていた。真夜中も余震は続き、その都度バスケットゴールが大きく揺れた。翌朝、通常通り再開した電車に乗り、生徒は自宅へと帰宅した。

東京地方は翌日から多くの物品がなくなる事態となった。原発事故の状態が安定しない事もあり、教職員を含めて4日間休校とし、その後対策会議が開かれた。修学旅行は延期となり、この年の6月、2年生の永平寺拝登と時期を同じくして実施された。3月中は部活動も自粛態勢となり、多くの部活動の合宿も取りやめとなった。

これらの体験は「被災体験」と呼んでよいであろう。今後予期される東海地震や首都直下地震などの地震に備えるためにも、備忘録程度ではあるが、ここに当時の様子を記載した。学校という場合は、その時によって、校舎内にいる教員や、生徒の数が大きく変わる。2011

年3月11日は、生徒が通常登校日ではなく、残っている生徒が少数であったこと、また残っていた生徒たちが「部活動」というまとまりのある集団であったことが、混乱を少なくしたと感じる。ただし、教員もまた一部の教員しかいなかったため、その中で役割を分担する柔軟さが求められた。家族とも連絡が取れない中、冷静に対応した多くの先生方の行動は、一後輩である自分から見ても適確なものであったと思う。今後、繰り返されることであろう震災時にも、各教員が連携して動けるよう、日頃より考え、備えておくことが大事であると感じた。

3. 被災地支援の始まり（震災直後2011年の支援）

駒澤大学高等学校は、震災直後より被災地への支援の形を探った。チアリーディング部は当時の部員の中に宮城県山元町に親戚がいるものがいたため、この地区に各家庭より集めた支援物資を送った。また、柔道部は本校OBが顧問である「石巻工業高校」と連携を取り、畳や柔道着の支援を行った。石巻工業高校は100枚の畳を4月末に本校から受け取り、5月より柔道部の柔道稽古の再開が実現できている。また、夏休みには本校の柔道部との合同合宿を本校の校舎内で行い、これは2015年現在も継続している。宗内生はこの年の文化祭から玄関ロビーに立ち、募金活動を始めた。このように、「各部活や団体が、それぞれの繋がりの中でそれぞれの場所に支援を行う」という形がまず形成された。支援内容も物資や金銭の援助が主であった。学校全体としては、生徒会主体となつて全体集会で義援金を呼びかけ、「200,198円」を曹洞宗のボランティア団体である「SVA

（シャンティ国際ボランティア会）に送っている。

さらに、三年生になつて柔道着が必要なくなった生徒達から柔道着を集め、被災地に送られた。この活動は、柔道着を受け取った被災地の高校生の映像と共に、フジテレビの「めざましテレビ」にて放送された。

2011年当時、原発事故の不安定な報道も含め、日本は混乱期にあった。「自粛ムード」と「風評被害」により東北の復興は大きく滞った側面があるように思う。政府を中心とした「支援の組織だった形（義援金の窓口など）」も十分に形成されていたとは言いがたい。ただし、日本国民全体が「異常事態」という認識の下に動いていた。一人ひとりが「何ができるか」を探り、手探りをしながら行動していたのが、この時期であつたと思う。本校も「修学旅行の延期」という大きな行事移動により、当時の教務部校外学習係はその対応に追われた。筆者も当時の校外学習係のメンバーである。今までとは時期の異なる修学旅行の実施に、台風や健康管理など懸念も多かった。宿泊先も初めて利用する場であつた。当時2年生の担任であつた筆者は、2年生の永平寺拝登の引率を終え、そのまま羽田に一泊して、当時の校外学習係長であつた吉野教諭と翌日から沖縄に行った。非常事態の中、日常の学校生活や、修学旅行をはじめとした生徒にとって大事な学校行事を、通常通り実施するため各方面で先生方が尽力していた。

4. 被災地後援活動の始まり（2012年3月…岩手県岩泉町訪問）

本校の被災地支援に、大きな転機が訪れたのは2012年3月に

大妻多摩女子中学高等学校生徒会から一通の手紙が届いた時であつた。その手紙の内容は、関東近辺の生徒会に被災地を応援する生徒会ネットワークの形成を呼びかけるものであつた。大妻多摩女子中学高等学校は、東京都の多摩市にある、全校生徒約1,000名の中高一貫女子校である。生徒会の活動が活発であり、当時の顧問の先生を中心に、JTBを通じて「テレビでありあまり報道されていないが、支援を必要としている地域と、交流し被災地支援を行いたい」という相談をし、岩手県岩泉町と被災地交流を始めていた。この手紙には2012年3月に、大妻多摩女子中学高等学校生徒会が岩泉町へ訪問する予定である旨も書かれていた。

当時から校友会（生徒会）の顧問であつた筆者は、この手紙の内容を校友会役員たちに伝えた。3章で述べたように、当時誰もが「自分に何ができるか？」を探っていたからだ。また、この時は校友会を大きく変革してから3年目であり、2年生（次年度3年生）の人数も6人と増えていた。このため、筆者は何か新しい活動が始められないかと模索していたところだつた。

この申し出に対し、生徒たちは、最初は困惑の声を上げた。その多くは、「被災地を応援したい気持ちはあるけれど、具体的に自分たちが被災地のために何ができるのかわからない」「そもそも被災地に行つたことが無いから、どのような場所なのか分からない」というものであつた。そして話し合いの結果、「ネットワークに参加するかどうかは別にして、まずは被災地に行つてみよう」という結論に至つた。

2012年3月28日～29日の1泊2日で、岩手県岩泉町への訪問が行われた。参加生徒は、1年生女子3名、2年生女子3名、男子2名

の合計8名であった。大妻多摩女子中学高等学校は27日、29日の2泊3日で岩泉町を訪れていた。本校の生徒8名と引率である筆者は、28日に、三陸鉄道の宮古駅で本隊と合流する形をとった。当時の行程表を表1に示す。この訪問の目的はあくまで「被災地を知る」事であった。また、大妻多摩女子中学高等学校と宿舎を共にすること、夜ミーティングを行い、今後の被災地支援のあり方を話し合った。

2012年3月28～29日 岩手県岩泉町訪問の行程表	
1日目	
6:56～9:30	東京 → 盛岡(はやて13号)
9:40～11:55	盛岡 → 宮古(高速バス)
13:10～13:52	宮古 → 小本(三陸鉄道) 鉄道社内で、 沿岸部被災状況の見学
14:30～16:30	沿岸部(小本橋・小本水門 ・防潮堤)見学
16:45～17:15	仮設住宅入居者講話 (仮設住宅集会場にて)
17:40	宿舎到着
20:30～21:30	生徒会ミーティング (駒澤大学高等学校 ・大妻多摩女子中学高等学校)
2日目	
9:00～10:00	小本漁港モシ滝口マンクローズ 漁船に乗って沿岸部より 被災状況を見学
10:30～12:15	龍泉洞見学
13:00～15:00	龍泉洞 → 盛岡(バス)
15:41～18:08	盛岡 → 東京(はやて30号)

表1 岩手県岩泉町校友会訪問における行程表

現地視察は、宮古駅から三陸鉄道に乗り、北上する形で始まった。震災当時は避難場所ともなった三陸鉄道の車内では、社員の方の解説の下、津波の被害を受けた被災地を見学することができた。三陸鉄道は全線開通されたのは2014年の事であるが、当時も一部区間は開通していた。宮古駅から小本駅まで移動する車中、目の前には、

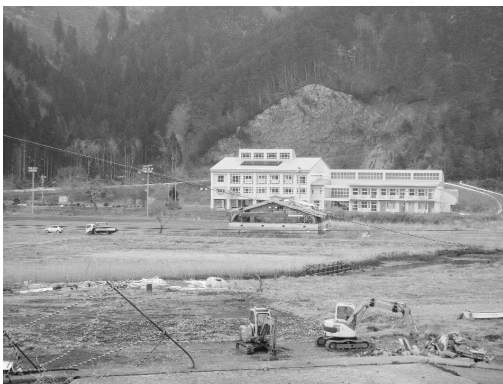


写真1 岩手県岩泉町小本中学校の写真(2012年3月)
※校舎の手前に写るのは、屋内プールの残骸である。

津波によって何も無くなった町並みが広がっていた。そしてその端には、屋根まで水に浸かった跡のある、ほぼ全壊した家屋があった。多くのトラックや重機が見え、まだ分別の済んでいない瓦礫の山が方々に山積していた。一方で新しい家屋もいくつか見えた。仮設住宅の再建を待てず、立て直して住んでいる家屋であると、三陸鉄道の社員の方は話されていた。田老町など、報道でも有名な地区の名称を聞きながら、「ここで何人の人が亡くなったのだろうか」と思いを馳せた。

岩泉町の小本地区に着くと、沿岸部の町並みはほとんどすべてがなくなっており、遠方に破壊された小本中学校が見えた(写真1)。少し高台に行くと町並みは残っており、破壊された町とのコントラストがはっきりしていた。そして山間に続く道沿いに集団の仮設住宅があった。

生徒達はこの仮設住宅に訪問させていただき、集会場にて町の方からお話を頂いた。

話の中で、「津波でんてんこ」という昔から伝わる言葉を聞いた。「津波が来たらとにかく逃げろ」という意味であり、この教えの大切さを繰り返し説かれていた。

岩泉町は、今回の東日



写真2 岩泉町沿岸部の瓦礫 (2012年3月)

本大震災において、死者13人、全壊177戸、半壊／一部損壊21戸という被害であった。^{*2}被害の大きい・小さいは、本来このような数で表して良いものではないと考えるが、死者がこの人数で済んだのは、沿岸地域のすぐそばが高台へ続く道になっており、多くの人がここに避難することができたからであろう。街中を歩くと、破壊された町並みと残存する町並みの境には津波に浸かった跡の残る建物が並んでおり、津波の高さを実感できた。また、そこから少し山間に入ると、過去の津波の到達記録が記されている石碑を見つけることが出来た。沿岸部では、小本水門周辺を語り部さんの案内で歩くことが出来た。沿岸部にはひしゃげた電灯やフェンスが生々しく残っていた。また、まだ分別されていない瓦礫の山が積み上げられていた。瓦礫には冷蔵庫などの電化製品や食器など、ついこの前まで普段の生活をそこで送っていた人がいたことを伺わせるものが並んでいた(写真2)。

筆者がこの訪問で特に印象的であったのは、小本中学校への訪問である。「大きく破損した場所」ということであるならば、他にもそのような場所はある。しかし筆者がこの場所を感じたのはとにかく「喪失感」であった。校舎は比較的新し

く、おそらく3月11日以前にはこの場所は希望が満ちた声のあふれる場所であったに違いない。しかし、その場所に人の気配は無く、浸水したあとの残る校舎だけが残っていた。周辺の町並みも何もなくなくなっていた。すべてが3月11日を境に泡のように消えたのだと考えると、胸が締め付けられる思いがした。小本小学校・中学校は体育館を含めて1階部分が浸水した。^{*3}そして通学する児童のうち24名の家屋が流された。

また、宿での光景も記憶に強く残っている。「震災特需」という言葉がこの時期言われるようになっていた。行き交う道路は、瓦礫の撤去のために現地入りしたダンプカーや重機だらけであった。宿にも、その工事関係者であろう人々が泊まっていた。工事関係者の方にはどちらかといえば力自慢の中年の方が多い。本来観光地の旅館であろう龍泉洞ホテルは、「楽しい観光地」とは異なる、殺伐とした雰囲気思えた。元々、岩泉町は観光で生業を立てている。「岩泉飲むヨーグルト」といえば、関東の様々な施設でも見かけることが多い。JTBが大妻女子中学高等学校をこの町に繋ぎやすかったのも、元々「観光」というパイプで旅行会社と地域が繋がっており、そして「風評被害によつて観光客が減ってしまった」という問題に町が直面していたからであると思う。震災後も、比較的早く「震災ガイド」という震災の語り部をする仕組みを作り、外部から観光客を受け入れる態勢を作っていた。しかし、この宿の雰囲気は明らかに「被災地」であり、有名な観光地である「龍泉洞」も閑散としていた。この訪問後、校友会役員たちは、被災地応援生徒会ネットワークへの参加を決めた。

5. 独自の被災地応援活動の始まり（2012年6月～7月）

4章で述べた岩泉町への訪問を経て、筆者は、「被災地支援」の大切さと難しさを感じていた。岩泉町の人々は口を揃えて、「震災当時はみんな来てくれたけれど、一年たつて自分たちは忘れられているんじゃないかと怖くなる、だから来てくれることが嬉しい」と言っていた。つまり現地に行くこと自体が、「被災地支援」そのものなのである。そして、自分が感じた「喪失感」や「被災地の孤独感」は、口で説明したからと言つて伝わるものではない。筆者は被災地に高校生を連れて行くことの意義深さを感じた。

一方ここで言う「難しさ」とは、無作為な訪問は、被災地に負担をかけることになるという事である。岩泉町は元々「観光地」としての基盤があつたからよいが、そうでない場合、多くの行政・そして被災者は余裕が無い。震災当時は瓦礫の撤去に「猫の手も借りたい」状態であつたが、震災から1年たつた2012年の段階では、そこまで明確にやる事は存在しなかつた。一方で、田舎の気質でもあるが、その場所を訪問すれば、多くの人が「おもてなし」をする。それは「心から喜んでくれている」表現ではあるが、一方「観光」とは別の生業を立てる人たちにとっては「負担」である事は否めない。支援が「負担」にならないためには、被災地との信頼関係をしっかりと結び、忌憚の無い意見を拾いながら、適切なタイミングで適切な交流が必要となるのである。

これを踏まえて、筆者は被災地応援活動をしていくためには「行政との繋がり」が必要不可欠であると考えた。多くの被災地は、地域ご

とに自立できるほどのコミュニティ力は損失しており、被災者は国や市の援助によつて復興への道筋をたどつていた。住居も「仮設住宅」という国が提供した施設であり、その生活支援も国が行っている。つまり、この段階において、支援物資や義援金など、復興の指揮系統は「行政」であり、「行政」の理解や連携を進めることが、被災者の真の現状を知ることにつながるのである。

こう考えていた筆者に、2012年6月被災地を訪問する機会が訪れた。筆者は、大学の博士後期課程に在籍して進めていた研究のつながりから、当時、宮城県岩沼市の震災復興会議の議長をされていた石川幹子氏と知り合う機会を得た。そして、被災地復興のためのワークショップの手伝いをさせていただく事になった。このワークショップは、「集団移転計画のための被災住民による都市計画作り」を目的としたものである。

岩沼市は、仙台平野の南部にある人口約44,000人の町であり、東日本大震災では、死者180人（平成26年1月現在）、全壊736戸、大規模半壊509戸、半壊・一部損壊4183戸（平成24年11月現在）という大きな被害を出した^{*4}。一方、この地区は北に名取市閑上地区（死者・行方不明者845人）、南に山本町（死者636人）という大災害地に挟まれ、あまり支援の手が伸びていなかった。当時の市長である井口経明氏はこの状況に、震災復興のトップランナーを走ることメディアの注目を集め、被災地復興を進めようと考えた。そして、岩沼市出身であり、都市計画を専門の研究分野とする、当時東京大学工学部教授の石川幹子氏（現 中央大学理工学部教授）とも協力しながら、一気に集団移転計画作りを進めた。このワークショップ

プもその一環として開かれたものである。^{*5} 2015年7月、岩沼市は日本で最初に東日本大震災による集団移転を実現することとなる。当時筆者が参加させていただいたワークショップの様子も、NHKのクローズアップ現代や多くの報道番組で報道された。

筆者はこのワークショップの手伝いに7月8日に岩沼市訪れた。そして、その時、当時の市の復興整備課の課長であつた高橋課長（現建設部長）と、菅井主任（現復興推進課課長）に出会った。このお二人のとの出会いが大きな転機となった。筆者は岩泉町での経験を通して、「高校生」と「被災地」を結ぶことの意義深さを話した。また、駒澤大学高等学校の紹介を行い、本校は「心の教育」を大切にしていること、すでに長野県信濃町で産学官連携のプロジェクトを5年以上行っていることをお伝えした。お二人は本校の理念と、被災地支援に関する自分の考えに大変興味と共感を持ってくださった。そして、まずは信頼関係作りに、人的交流を進めようとご提案くださった。その第一歩として、この年の7月、復興夏祭りに本校のチャアリーディング部が招待されることとなる。

6. 継続的な被災地訪問と被災地応援活動

（2012年7月～2015年12月）

5章の冒頭に述べたように、被災地を訪問する事は、被災者の心の支えになることではあるが、一方でその現地受け入れ先の負担に配慮が必要である。そして、被災地の現状は日々刻々と変わり、そのたびに出来る事は変化していく。筆者はまず「市のお祭りに演者と

2015年11月7日～8日 宮城県岩沼市訪問の行程表	
1日目	
5:00～10:15	東京 → 岩沼（高速バス）
11:00～12:00	リハーサル （勤労感謝センター体育館にて）
12:30～14:00	岩沼市秋の収穫祭 演技者として参加（被災地応援演技）
14:00～15:00	地元チア団体ディアーズの皆さんと 演技交流
15:00～16:00	被災者の方々と交流
16:15～19:00	グリーンピア岩沼にて入浴・食事
19:30～20:30	里の杜東仮設住宅集会場にて講話 「震災時の体験、 仮設住宅の暮らしについて」
22:00	仮設住宅集会場にて就寝
2日目	
9:00～10:15	名取市閑上地区（被災地区）見学 （閑上中学校など） ※閑上震災を伝える会 案内
10:15～11:00	岩沼市 千年樹望の丘 集団移転地区見学（沿岸部を含む）
11:15～12:15	食彩館（集団移転地区） にて被災地応援演技
12:15～13:00	岩沼市の皆さんと交流
13:00～19:30	岩沼 → 東京（高速バス）

表2 宮城県岩沼市 チアリーディング部訪問における行程表（2015年11月）



写真3 岩沼秋の収穫祭におけるチアリーディング部の演技（2014年11月）

して参加する」という、なるべく被災地に負荷をかけない方法を模索した。そして、2012年の復興夏祭りへの参加をきっかけに、2013年・2014年・2015年と、岩沼市の農政課が主催する「秋の収穫祭」へチアリーディング部が参加させていただいた（写真3）。参考として2015年度の行程表を表2に示す。秋祭りでは常に

最後か、後ろから2番目の発表順にさせていただき、祭りを締めくくる形で演技を行った。生徒は悪天候の年も懸命に演技をし、演技は常に大きな拍手で迎えられた。具体的な人数をカウントしたわけではないが、年々観客の方々も増え、反応も良くなっていたように感じる。

さらに筆者は、この活動を行う中で、徐々に地元のNPO法人やスポーツ団体、また行政内の他の部署の人々とも積極的に知り合っていた。そして、その中で被災地の方々とイメージを共有できたものについて、その都度新しい試みを試みてきた。以下にその活動の一端を紹介する。

6.1 地元チアダンスチームDEARS（ディアーズ）／地元住民

との交流（2013年～2015年11月）

2013年～2015年の11月、岩沼秋の収穫祭での演技の折には、当時、市の農政課で秋の収穫祭担当であった桂島氏の計らいにより、地元のチアダンスチームである「ディアーズ」にも声をかけていただいた。「ディアーズ」は主に小学生～中学生を構成メンバーとしたチア団体であり、ダンス演技を得意としている。祭りにおいては、本校のチアリーディング部の演技前後に「ディアーズ」が演技をした。また、祭りの終了後、体育館や会議室をお借りして交流イベントを行った。本校のチアリーディング部は、組体操技術であるパートナースタンツやピラミッド等アクロバティックな演技も得意としており、ディアーズのメンバーは本校チアリーディング部との交流の中で初めて「パートナースタンツ」を経験したものも多い（写真4）。ま



写真4 ディアーズ岩沼（地元チア団体）との交流風景（2015年11月）



写真5 玉浦小学校体育館における応援演技（2014年11月）

た、3年間交流を継続してきたことで、互いの顔を覚え、本校との交流や演技をディアーズの子供たちが楽しみにしてくれるようにもなった。本校の生徒たちも、毎年何かしら手作りのお土産を用意するなど、積極的な交流姿勢を見せてくれている。

また、2014年・2015年に関しては、演技を行った翌日に、地元住民の方の前で演技披露をする機会を頂いた。2014年は、津波によって浸水した地域の子供たちが多く通う、玉浦小学校の体育館をお借りし、演技を行った（写真5）。地元の有志やPTAの呼びかけで多くの地元住民の方が集まり、演技後は、もちをついたり、芋煮を食べたりしながらコミュニケーションを取った（写真6）。この交

流イベントの前には名取市閑上地区を回り、津波によって浸水した中学校をはじめとし、震災による傷跡を見学した。また閑上震災を伝える会の大宮理香さんをはじめ、被災経験者の方にお話をいただき、震災の恐ろしさ、命の尊さを教えていただいた(写真7)。生徒たちは語り部の方の話を聞いているときは勿論であるが、その思いを胸に臨んだ交流イベントの演技後に涙する姿も見られた。観客である地元住民の方もその姿を見て涙してくださっていた。2015年は、7月に町開きをしたばかりのショッピングセンター「食彩館」の屋外イベント会場で演技発表を行った(写真8)。雨の降る寒い中ではあったが、多くの方にお越しいただき、たくさんの方の拍手を頂いた。また、同施設



写真6 地元住民との交流風景(2014年11月)



写真7 閑上中学校における防災教育の様子
※津波にのまれた教室にて(2015年11月)



写真8 岩沼市食彩館における地元住民との記念写真
(2015年11月)

からは来年度の演技のオフアームすでにいただいている。生徒たちの発表演技が素晴らしい事は勿論であるが、毎年伺うことで、この地域の住民の方に「駒澤大学高等学校」の名前は広く知っていただけるようになったと思う。その安心感・信頼感が被災地の負担感を減らし、「被災地応援」という趣旨を正しく実行できる重要な要素になると筆者は感じている。

6.2 仮設住宅における防災教育

2015年11月のチアリーダー部の訪問においては、宿泊場所に関して新たな試みをした。2015年7月は、岩沼市にて日本

で初めての集団移転の町開きが開かれた時である。移転の対象となったのは、沿岸部で津波の被害にあった、相野釜(あいのかま)、藤曾根(ふじそね)、二野倉(にのくら)、長谷釜(はせがま)、蒲崎(かばさき)、新浜(しんばま)の6地区の住民の方である。玉浦西地区と三軒茶屋西地区に約20軒の集団移転地区が完成し、

7月19日にまち開きのイベントが開かれた。これにより、岩沼市の仮設住宅の中でも「里の杜東住宅」に在住していたほとんどの住民の方が移転となり、この仮設住宅の多くが空き家となった。そこで、秋の収穫祭に参加するために岩沼を訪れた11月2日から3日までの間、本校チアリーディング部は、この仮設住宅の集会場に泊まらせていただくという経験をさせていただいた。

集会場では、震災当時より、NPOを立ち上げるなどして地元をまとめてきた谷地沼富勝氏、および里の杜東住宅自治会の浅野様から「震災時の体験、仮設住宅の暮らしについて」という内容でお話を頂いた。お話の中で、震災後、この集会場で開かれたイベントの数々や、その時の住民の様子を写した写真を見せていただく機会もあった(写真9)。話の中で、お

二人は繰り返し、行政への感謝と、故郷を大切に思う心情を述べられていた。このような行政と住民の信頼関係が、復興を推し進めた最大の要因であると筆者は感じた。

また、お話の中では、筆者が5章で懸念事項として記載した「イベント疲れ」にも触れられていた。仮設住宅では震災後多くの励ま



写真9 里の杜東仮設住宅集会場における防災教育の様子
(2015年11月)

しのためのイベントが開かれた。しかし、毎週末イベントが存在すると、かえって避難住民の方々の「プライベート」の時間を奪ってしまう可能性がある。建設業を営む谷地沼さんのお話では、阪神淡路大震災の折「被災地で笑う時は、被災者に寄り添い共に笑う事」と指示を受けた事もあるそうである。「被災地」と関わる事の難しさを再認識するお話でもあった。一方で、谷地沼さんからは、何年も継続した活動が続ける本校へ、強い感謝の気持ちを伝えていただいた。震災から5年が経とうとする今、この「忘れられていない」という感覚、実際に足を運んでくれることが本当に嬉しいと谷地沼さんはおっしゃっていた。

仮設住宅の薄い壁、冷える床を経験しながら、生徒たちは眠りについていた。この機会は、自治会の方の多大な協力によって実現した。また、里の杜サポートセンターの榊山様、岩沼市長をはじめ、被災者支援室の方々の大いなるご理解があり、実現した事をここに記載したい。一泊のみの滞在ではあったが、生徒たちにとって生涯忘れがたい経験となった事は、疑う余地がないであろう。

6.3 岩沼市長「井口経明」氏、講演会(本校来校)

2014年4月、岩沼市秘書課の方から本校にお電話があった。その内容は、震災当時から復興を牽引してこられた井口市長が2014年で退陣されるという旨と、市長が退任前に、本校にお礼に伺いたいという、大変光栄なものであった。

筆者はこの件を校長・教頭と相談し、キャリア教育という形で、講

による支援の格差について説明されていた。特に「メディア報道による支援の格差」についてのお話は、報道では知りえない「岩沼市長」ならではのお話であつたと筆者は感じた。5章でも記載したように、大きな死者を出した地区に囲まれている岩沼市では、なかなか支援の手が伸びなかった。岩沼市玉浦地区の子供たちからは「なんでもうちの市にはサッカー選手や芸能人が来てくれないの？」という声が上がったそうである。前述したように市長はとにかく復興のスピードを上げ、独創的なアイデアを出すことで、支援の手を集めようと考えた。そのアイデアの一つが「千年希望の丘」である。「千年希望の丘」とは、林野庁が主導して再生する海岸林とは別に、沿岸部に丘の森林公園を作り、緑の防潮堤とする計画である。^{＊6}岩沼市は仙



写真10 井口明(岩沼市前市長)講演会の様子(2014年5月)

演会を実施する事となった。被災地の事の多くはメディアでも知ることが出来る。しかし、実際に現場で動いている方、様々な困難を乗り越えて復興を推し進めた市長の声は、必ずや生徒に響くものがあると考えた。

2014年5月24日、中間試験の最終日に全校生徒を集めて講演会は実現した(写真10)。井口市長は、被災地の復興の難しさ、メディア報道



写真11 千年希望の丘植樹祭(樹望式)への参加の様子(2013年6月)

台平野に位置し、広大な平野に農業地帯が広がっている。そのため、2011年3月11日には、津波が沿岸部の松林を倒し、かなり内陸の家屋まで津波が到達した。そこで、海岸沿いに「命を救う避難場所」と「防潮堤」の役割を果たす、震災瓦礫で作った丘の公園を作る事を岩沼市は計画した。植える樹種も根の浅い松では無く、広葉樹を選択した。2013年6月9日には「樹望式」と呼ばれる第一回の植樹祭が開かれ、全国各地から4,500人以上が集まり、30,000本の苗木が植えられた。本校からも学校長・同窓会副会長はじめ校友会の生徒5名が参加し、植樹を行った(写真11)。

井口市長は、講演の中で繰り返し「岩沼市」に目を向けてくれた

事への感謝、そして活動を継続している事への感謝を述べていた。2012年度の卒業式には、卒業生にむけての祝辞を本校に送ってくださっている。また、その後2013年、2014年のチャリーディング部訪問の折には、続いて当選された菊地啓夫現市長も挨拶に来てくださっている。さらには、1章に記載した通り、2014年に駒澤大学高等学校は岩沼市より功勞

者として表彰を受けている。このような自治体との信頼関係は、何より「継続」した事で構築されたものであると筆者は感じている。

恐縮な事ではあったが、このような一私立高校にわざわざ足を運んでくださり、生徒にかけがえの無いお話をしてくださった井口前市長には、心より感謝の意を示したい。

6.4 文化祭における被災地物産の販売と寄付

6.1～6.3に記載した活動の一方、全校生徒が参加できる活動として、校友会は文化祭での被災地物産の販売を行っている。また、2011年より、三年生や部活動の模擬店で出た利益金の一部、および校友会独自に製作したチャリティーグッズの売上金を、「被災地への義援金」として寄付する事を行ってきた(写真12)。寄付額とその内容を表にしたものを、表3に記載する。

2013年より始まったオリジナル缶バッジの販売は、デザインを公募の上で作成し、チャリディング部やサッカー部の有志のお手伝いもいただきながら実施している。この他にも、販売を委託される形



写真 12 文化祭における被災地物産販売の様子
(2012年9月)

で、2012年には岩沼市青年会が作成したチャリティーリストバンドと、岩沼市に本社をかまえる株式会社「にしき食品」の商品である牛タンカレー／牛タンシチュー／コーンチャウダーを販売した。2013年からは、NPO法人ががんばつと玉浦より、塩害農地で収穫されたお米である「がんばつと米」を仕入れて販売すると共に、柔道部のもち米や家庭研究部のカレーライスの原材料にも一部これを使用している。また、2015年からは、岩沼の合同会社「つながる木つと」が取り扱う、木の雑貨を販売するようになった。この木の雑貨は、震災で津波をかぶった瓦礫を再利用したものである。

さらに、被災地応援ネットワークを組む大妻多摩女子中学高等学校の生徒会のメンバーは、同校が連携する岩手県岩泉町の物産を、2012年の文化祭より直接来校されて文化祭で販売している。

年度	義援金	義援金内訳	支援先
2011年	80,055	3年生の模擬店の利益金	曹洞宗ボランティア団体(シャンティア)
2012年	180,383	3年生の模擬店 被災地支援物産販売利益金	千年希望の丘事業(岩沼市)
2013年	450,000	3年生の模擬店 部活動模擬店の利益金 被災地支援物産販売利益金	千年希望の丘事業(岩沼市)
2014年	555,465	3年生の模擬店 部活動模擬店の利益金 被災地支援物産販売利益金	千年希望の丘事業(岩沼市) ※被災地応援活動の基金として 学校管理
2015年	636,999	3年生の模擬店 部活動模擬店の利益金 被災地支援物産販売利益金	千年希望の丘事業(岩沼市) ※被災地応援活動の基金として 学校管理

表3 文化祭における被災地物産およびチャリティーグッズ販売に伴う義援金
(2011年～2015年)

2015年度からは市立川崎高校の生徒会もこれに参加するようになった。

このように、少しずつではあるが、被災地応援活動への参加も広がりを見せている。全校生徒が被災地を訪れる機会を作る事は、コスト的にも受け入れ側的にも、負担が大きく実現は難しいであろう。文化祭での活動は、多くの生徒に被災地応援活動への参加の機会を作るという意味で、大変意義深いものであると感じている。

7. 生徒会被災地応援ネットワークの現状と課題

(2015年12月現在)

4章で記載したように、本校が岩沼との被災地応援活動に大きく動き出したきっかけは、大妻女子中学高等学校の生徒会から「生徒会被災地応援ネットワーク」の形成の呼びかけがあったことがきっかけであった。その後も、同校の呼びかけをきっかけに、本校を含めたいくつかの高校の生徒会が集まり、互いの学校が行う被災地応援活動を紹介しあっている。表4に、この4年間で実施されたミーティングの期日と参加校を記載する。

さらに、このネットワークの活動を紹介する事を目的として、2012年には、桜美林高校・大妻多摩女子中学高等学校・駒澤大学高等学校の被災地での活動を紹介した「繋縁」という新聞が発行された。また、6.4で紹介したように、本校の文化祭に、市立川崎高校・大妻多摩女子中学高等学校の生徒会が来校し、被災地物産の販売を行っている。これらは、表4で示したミーティングで決定し実現

した試みである。

2015年に開かれたミーティングには、合計で33名の高校生が参加し、今後の可能性を感じさせる話し合いが、グループワーク形式で行われた(写真13)。この2015年のミーティングの中では、次のようなアイデア・意見がまとまった。

1. 被災地応援ネットワークに参加する学校合同で被災地応援活動に関する冊子を作り、文化祭で配布する。また各校でホームページをつくり互いにリンクさせる。

2. 各学校が連携する被災地をレポートし、その映像をYoutubeなどで配信したり、文化祭でビデオレターとして流したりする。

3. 互いの文化祭に行き、被災地物産の販売を行う。どれも素晴らしいアイデアであり、一つでも多くの実現が求められる。

各々の生徒会にとって、「自分たちの学校の活動を他校にプレゼン

年月日	参加校(生徒会)	場所
2012年3月28日	大妻多摩女子中学高等学校、駒澤大学高等学校	岩手県岩泉町
2012年8月1日	桜美林高校、駒澤大学高等学校、大妻多摩女子中学高等学校	大妻女子大学
2013年3月19日	桜美林高校、駒澤大学高等学校、大妻多摩女子中学高等学校、市立川崎高校	大妻女子大学
2015年3月7日	公文国際学園高等学校(顧問のみ)、市立川崎高校、大妻多摩女子中学高等学校、駒澤大学高等学校	駒澤大学高等学校
2015年7月12日	関東生徒会連合代表2名、市立川崎高校、都立南平高校、大妻多摩女子中学高等学校、駒澤大学高等学校	駒澤大学高等学校

表4 生徒会被災地ネットワークミーティング(2012年～2015年)



写真 13 生徒会被災地応援ネットワークのミーティングの様子 (2015 年 7 月)

「ティーンズする」という機会
はなかなか無い。その意味で
も、この被災地ミーティング
が生徒たちの成長の場になっ
ていると感じる。一方、多く
の意見が活発に交わされて
いる反面、実現に至った活
動がまだ少ないというのが、
2015 年段階での課題であ
ると感じる。この原因およ
び解決法を、筆者は以下のよ
うに考察する。

まず、多くの学校の生徒会
が連携して行動力のある組織になるためには、より密にミーティング
を開く必要がある。「それぞれの生徒会活動がある中で、なかなか普
段の生活の中で、他校との活動にまで気を回す時間が作れていない」と
というのが各校の生徒会役員の現状であろう。よりこの組織を充実さ
せるためには、ミーティングを定例化し、ミーティングの開催時に
は、次のミーティングの期日と議題が決まっているようにしなければ
ならないと思う。

次に、生徒会のメンバーが入れ替わる事による主力メンバーの損失
が問題点として挙げられる。致し方の無い事ではあるが、高校生は 3
年間で卒業していく。被災地応援活動に熱意を持ち、積極的なメン
バーが在籍するうちは良いが、引き継いだもののモチベーションはど

うしても始めたもののモチベーションより劣る事が多い。先輩から後
輩へ、経験と記録を引き継ぎ、次世代の被災地応援活動を担う人材を
育成し続ける事が、生徒主体の被災地応援活動を継続するためには必
要なのである。今後、復興が進み震災の記憶が薄らいでいく中で、こ
れは非常に重要な課題である。

最後に、各校のより上層部（学校同士）の連携の必要性をここでは
訴えたい。現在は各校の生徒会が連携して意見を出し、生徒会顧問が
その報告を受けながらメール等つながって情報交換をするにとど
まっている。この仕組みによつて有益な情報交流および刺激を与え合
う事はできている。しかし、互いの連携先に訪問するなど、合同で被
災地応援活動を行う事はあまり実現していない。これらを実現するた
めには、学校同士が深く連携し、各学校がそれぞれの生徒および保護
者に説明責任を果たせるよう、互いの活動をよく理解しあう必要があ
る。また金銭面でも、複数の学校が金銭を出し合つての支援には、財
政処理上様々なハードルがある。これらは生徒たちだけで解決する事
が出来ない問題である。筆者もこの活動に携わる一員として、活動の
内部広報・外部広報に努め、各校の理解が進むよう努力したい。そし
て、本校が岩沼市での活動の幅を広げ、足元を固めていく中で、他校
の生徒にも、被災地を知り応援する機会を提供する事ができれば、こ
の「被災地応援ネットワークの形成」の本意を果たすものになると考
えている。

8. あとがきと今後の展望

本稿では、震災当時から現在までの駒澤大学高等学校の被災地応援活動について、時系列に追いながら記述した。筆者にとつても、東日本大震災のような大きな震災を経験した事は初めての経験であった。震災当時、混乱する報道、現実のものとは思えない映像を見ながら、筆者は使命感にも似た感情を覚えた。現在の日本で「地学」の専任教諭として高校に赴任し、その全校生徒に地学を教える機会をいただけている30代の教員はそう多くない。しかも、2015年現在、自分は素晴らしい職場の仲間と大学の指導教官に恵まれ、大学と高校の双方で教鞭と活躍の機会をいただけている。その恩に報いるためにも、今自分が社会に出来る事は何かを常に考えてきた。この紀要に記述した内容は、その中で筆者が考え、動いてきた内容の一部である。

2016年度、駒澤大学高等学校は千年樹望の丘の一区画に植樹をする場所を与えていただいており、その整備の協力を要請されている。また、2016年3月26日〜27日にかけて、本校の吹奏楽部が初めて岩沼市を訪れ、玉浦中学校の吹奏楽部および岩沼小学校の金管バンドの子供たちと交流コンサートを行う事が企画されている。何から順に、どこまで具現化していくかは、これからも被災地の事を第一に考えながら、バランスを取って調整していかなければならない。しかし、まずはこのような機会と可能性を与えていただいている事に感謝したい。

これらの活動の多くは岩沼市役所の復興整備課・農政課・復興推進課・被災者支援室をはじめ、NPO法人がんばつと玉浦、岩沼みんなの家など、多くの被災者の方々の気持ちによって実現しているものである。このように、活動の一つ一つに尽力してくださっている方々が

いて、その方々もまた震災をきっかけに人生が変わった人達である事を、忘れてはいけないと筆者は思う。そして、震災が必ず繰り返される日本において、未来を担う高校生に今伝えられる事を、これから模索して行きたい。

「被災地応援活動」は、文中に記載したようにとにかく「継続」する事が大事な活動である。そのためには、今後も多くの方々のご協力とご理解が必要になる。人に恵まれ、この活動が実現した事に深く感謝し、謝辞に記載したい。東北をはじめとし、日本の復興が一日も早く進み、震災に負けない若者がこの国に育っていく事を祈り、結びの言葉とさせていただきます。

なお、これらの活動の一部はその都度、本校のホームページで記事として公開してきた。また、各年に実際に被災地応援活動を体験した生徒の感想文は、本校で毎年発行されている校友会誌「葦」に記載されている。本稿と共に、参考にしていただきたい。

9. 謝辞

まず本校執筆にあたり、被災地応援活動を応援し続けてくださった駒澤大学高等学校の全教職員ならび、その管理職である鈴木貞雄氏（前校長）・貫井洋氏（前教頭・現校長）・井上誠二氏（現教頭）に御礼申し上げます。また、この活動の実現のためには、生徒指導部校友会係に所属する多くの先生方のご助力を頂いた。特に渡我部由紀教諭（前校友会係長）・加藤寛隆教諭（現校友会係長）には活動の実現のために多くのご理解とご助言を頂いた。実際に被災地を何度も訪問して

くださったというチアリーディング部顧問の土田絵美教諭・杉村曉美教諭ならびにチアリーディング部の生徒達と共に、格別の謝意を示す。

さらに、被災地の訪問活動時においては、本校の父母会である舩檀会より、常に助成金を頂いている。また、本校同窓会からも、2013年度より助成金を頂き、より生徒たちの金銭的負担を減らしながら持続的な活動を行っている。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

一方、被災地応援ネットワークにおいては、大妻女子中学高等学校の矢澤廣範教諭は勿論のこと、市立川崎高校の小林和紀教諭からは、いつもこの活動の発展のために有用な情報と、生徒たちの成長の機会を頂いてきた。ここに謝意を表すと共に、今後さらなる発展のため、引き続きのご縁をお願いしたい。

岩沼市役所においては、前市長の井口経明氏、現市長の菊地啓夫氏は勿論の事であるが、現建設部長の高橋伸明氏、総務部復興推進課／政策企画課課長の菅井秀一氏には、いつも格別のご高配を頂いている。さらに、活動を継続していく中で、現市民経済部農政課課長の石垣茂氏、現岩沼市教育委員会生涯学習課の桂島和浩氏、現復興整備課課長の星幸浩氏、復興整備課副参事兼課長補佐の菅原信浩氏、被災者生活支援室の佐藤吉毅氏、里の杜サポートセンターの榊山明様、榎木翔一様には大変お世話になっている。これを機に皆様のご理解とご協力に感謝する。また、この岩沼市との連携のきっかけを下さった、中央大学理工学部石川幹子教授、および首都大学東京都市環境学部の泉岳樹助教にも感謝の意を示したい。

さらに文中でも紹介させていただいたが、近年の被災地住民との交

流イベントは、震災時から現在に至るまで様々な活動をしてきた玉浦の谷地沼富勝氏のご協力なくしては成り立たない。心より感謝申し上げますと共に、谷地沼氏よりご縁をいただいた、合同会社つながる木々と代表の佐藤ゆかり氏、関上震災を伝える会の大宮理香氏にもあわせて御礼申し上げます。

最後に、本校のチアリーディング部の演技を見てくださった岩沼市の皆様、そのほか本校に関わってくださった多くの岩沼市の皆様に深い謝意を表し、謝辞の結びとさせていただきます。

(参考文献)

- * 1 復興庁：避難者等の数 平成28年1月28日（PDFファイル）、復興庁ホームページ、<http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/hinanshasuu.html>, 2016.
- * 2 岩泉町：災害に関する情報（東日本大震災被害状況等）、岩泉町ホームページ、<http://www.town.iwazumi.iwate.jp/saigai.html>, 2016.2.2.
- * 3 伊藤俊介・中山誠健：岩手県岩泉町 学校再開の現状ヒアリング・視察報告、http://news-sv.aij.or.jp/keikaku/shinsai_data/ito110914upload.html, 2011.6.22.
- * 4 岩沼市：2011.3.11 東日本大震災 岩沼市の記録／震災から3年 地域再生と復興への軌跡、宮城県岩沼市、2014.
- * 5 園田千佳・坂本慧介・石川幹子：復興街づくりの計画策定プロセスにおける住民ワークショップの役割に関する研究－宮城県

岩沼市における復興まちづくりを通して、都市計画論文集、
Vol.48, No.3, 2013.

* 6 石川幹子：人と自然の力強い復元力をいかした復興：自然共生・
田園都市と千年希望の丘（東日本大震災から1年を経て）、公園
緑地、Vol.73, No.1, 2012.

* 7 石川幹子・大和広明・大澤啓志：東北地方太平洋沖地震津波
による海岸林の被災分析と文化的景観の特質に関する研究：宮
城県仙南平野岩沼市沿岸部を対象として、都市計画論文集、
Vol.48, No.3, 2013.